<訂正版>

●木村有子さんトーク “ラダ だいすき！ チェコのヤポンカが児童書の翻訳家になるまで”

2024年1月 17 日(水)開催

岩波の子どもの本創刊70周年記念展の一環として開催されたチェコ語の翻訳家木村有子さんのトークでは、2023年11月に刊行された『きつねがはしる チェコのわらべうた』と、2024年1月に出たばかりの初エッセイ『チェコのヤポンカ』についての楽しいお話を伺いました。チェコの国民的画家であるヨゼフ・ラダ(1887-1957)の本は現在も数多く出版されており、本国では雑貨や様々なパッケージにイラストが使用されたりと大人気！ 新刊本はラダの2冊のわらべうた絵本から日本の子どもたちに紹介したい詩を38篇選んで編んだもので、表題の「きつねがはしる」は特に有名な詩です。木村さんがピーター・シス(チェコ出身で、現在アメリカで活躍する世界的な絵本作家)にこの本の出版の報告をＥメールでした時、返信の文面にはなんとチェコ語で「きつねがはしる」が書かれていたそうです。シスさんはもちろん日本語は知りませんが、この表紙を見た途端に懐かしい詩が蘇ったに違いないと木村さんは仰っていました。チェコでは幼い子どもに日常的にわらべうたを歌ってあげる習慣があり、木村さん自身もチェコに住んでいた子どもの頃に近所の人たちが歌うわらべうたをたくさん聞きました(今も覚えているものは少ないそうですが、当日は中の1編「こいぬとこねこ」をチェコ語で歌ってくださいました！)。ですから、わらべうた絵本はラダ以外の画家が描いたものもたくさんあり、当日は少し古い時代の画家が描いた絵もラダと並べて見せてくださいましたが、比べてみるといかにラダの絵が時代も国も越えて受け入れられる要素を持っているかがわかり、改めてラダの魅力が実感されました。本の中の「きのことり」はナルニア国スタッフ・イチオシの一編なのですが、「これを見るとチェコ人のキノコ愛がとてもよくわかる」という解説も、あちらで暮らした経験をお持ちの木村さんならではのエピソードだと楽しく伺いました。

このフェアにタイミングを合わせるように出版された初エッセイ『チェコのヤポンカ』(かもがわ出版)には、木村さんが1970年代に社会主義のチェコスロバキアで小学生時代の2年間を暮らした経験や、そののちの辛い留学時代のこと、ベルリンの壁崩壊やビロード革命といった歴史の転換点に居合わせた貴重な経験が綴られています。時に辛い体験を経てもなお木村さんのチェコを愛する気持ちが揺らがなかったのは、子どもの頃の体験(異文化の暮らしの中で得た温かな人間関係と、豊かな自然に囲まれた日々)が幸福な記憶として刻まれ、その時出合った素晴らしい絵本作品が寂しい時も支えになってくれたからに他なりません。木村さんの体験は「子どもにとって大切なもの(生きる力になるもの)は何か」という本質的なことを私たちに教えてくれます。そういう意味で、大人の方にはぜひ木村さんのエッセイを読んでいただきたいと思いました。

☆そしてこの木村さんのエッセイ第2章の「留学時代・ドイツ時代」が、次のイベント(野沢佳織さんの朗読会)へと奇しくもつながっていったのでした……。 オドロキッ！

●野沢佳織さんによる朗読とおはなしの会 『モノクロの街の夜明けに』 2024年1月25日(木)開催

綿密な取材に基づいた歴史フィクションを得意とするルータ・セペティスの最新刊『モノクロの街の夜明けに』(岩波書店)は、1989 年のルーマニア市民革命の様子を17歳の少年の目から描いた息詰まる YA 文学です。心ならずも密告者に仕立て上げられてしまったクリスティアンの苦悩と、自由への渇望、恋などが描かれた本書は、結末までページをめくる手が止められない緊迫感に満ちた作品でした。当時の詳しい歴史を知らなくても物語を楽しむことはできますが、このイベントに参加した読者のために、野沢さんは物語の背景となるルーマニアの歴史や東欧革命についてまず解説をしてくださり、そのあと本の中から4つの場面を抜き出して朗読してくださいました。

1. 主人公のクリスティアンが初めて諜報員(セクリターテ)のラケットハンドに合う場面
2. 恋するリリアナとビデオナイトに出かけ、映画「ダイ・ハード」を見る場面
3. じいちゃんとバルコニーで話す場面
4. 12月21日、ブカレストでの市民革命の始まりの場面

市民を監視する秘密警察も恐ろしいのですが、どこにいるのかわからない密告者の存在(それは家族の中にいるのかもしれない…)が人々を追い詰めていく様子や、そのような息苦しい社会の中でも恋する少女とわずかな自由を楽しむ若者の瑞々しい心、尊敬する祖父の衝撃の告白、そしてついにやってきた革命の始まり――。一人一人の登場人物を声で描き分ける野沢さんの朗読は素晴らしく、ドラマチックな中でも特に心揺さぶられるシーンを選んでくださったこともあって、初めから一気に物語の世界へと引き込まれました。特に、虐げられた人たちがついに声を上げる最後の革命の場面では(といっても、物語ではまだこの後、一山もふた山も越えなければならないのですが…)、胸が熱くなって思わず涙がこみ上げてしまいました。先に読んで参加された方はもちろんのこと、これから読もうという方も期待で胸が高鳴る時間をご一緒できたに違いないと思います。決して派手は本ではありませんし、手渡す人がいないと子どもが自ら手に取るには難しい内容には違いありませんが、読者はクリスティアンの体験を共にすることで無味乾燥な現代史の授業では味わえない「そこに生きた人たちの体温」を感じることができるのです。先の見えない時代だからこそ、過去の歴史に学ぶことが大切で、それを優れた文学で体験できる喜びは深く心に刻まれて、その人の中に残り続けると思いました。

☆二つのイベントそれぞれにご参加くださった皆さま、本当にありがとうございました！ (文責:川辺)